



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 人文學報 2004, 90: 221-242

ISSUE DATE:

2004-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/48633>

RIGHT:

彙 報

2003 年（平成 15 年）1 月～2003 年（平成 15 年）12 月

研 究 状 況

I 班 研 究

人文学研究部

文化相渉活動の諸相とその担い手 班長 山室信一

本研究班は、複数の社会空間をまたがる文化の出会いと繋がり、そして反発・摩擦などの諸相を分析、そこから地域文化と世界文化の編成の意義を探ることを課題として出発し、文化連関という研究分野と分析枠組みの創出をめざしている。この文化連関学とでもいうべき領域のデザインをいかに描くかを求めて、既存の学問分野や理論がいかなるものであり、また何がフロンティアとしてありうるかについて検討を進めることが当面の課題となる。そのため、班員の専門や研究対象についてその達成と問題点を検討した初年度の成果を踏まえて、今年度は文化研究の方法論や文化相渉の担い手になる個人や調査機関についてとりあげ、新分野の可能性について議論を重ねた。

なお、当研究班は今年度をもって終了し、報告書の作成を進める予定である。

班員 落合弘樹 籠谷直人 菊地暁 坂本優一郎 高木博志 高階絵里加 竹沢泰子 藤原辰史 山本有造（以上所内） 蘭信三（留学生センター） 早瀬晋三（大阪市大） 加藤雄三（総合地球環境学研究所） 河原林直人（龍谷大・非常勤） 小林啓治（京都府立大） 田中隆一（日本学術振興会） 酒井一臣

（大阪大・院） 坂部晶子（京都大・院） 本間千景（仏教大・院）

1 月 27 日 「オランダ人」から「イギリス人」へ
— ある金融業者とイギリス財政革命 — 坂本優一郎

2 月 10 日 主権は越えられるか？ ハーグ平和会議再考 酒井 一臣
日米安保体制と台湾の国家安全保障 呉 春宜

2 月 24 日 アメリカ植民地支配下フィリピンの日本商店・商品 早瀬 晋三

3 月 10 日 満洲移民の越境体験 — もうひとつの満洲移民像をもとめて — 蘭 信三

3 月 24 日 フランスへ渡った日本 — 河村清雄の《建国》について 高階絵里加
「満州国」期ハルビン朝鮮人社会と「対日協力」 田中 隆一

明治維新期の社会と情報 班長 佐々木克

本研究班の目的は、明治維新という変革期を〈情報〉をキイ・ワードに読み解き、諸問題を照射することにある。1996 年 4 月から報告を積み重ねてきたが、風説留や知識人ネットワーク、あるいは西洋留学、新聞といった、ただちに連想されるテーマを深めるというよりも、むしろ研究は 19 世紀における日本社会形成の諸相を総合的に検討する作業へと展開した。従ってその対象も多岐にわたり、昨年度終了予定であった研究会もさらに 1 年延長し、とくに幕末期の政治情報の動向などを中心に研究を進めた。2004 年 3 月のシンポジウム開催をもって班を終了するとともに、2004 年中に報告書を刊行する

予定である。

班員 高木博志 高階絵里加 谷川穰（以上所内） 青山忠正 原田敬一 笹部昌利（以上仏教大） 長志珠絵（神戸市外大） 落合弘樹（明治大） 小股憲明（大阪女子大） 勝部真人（広島大） 岸本覚（鳥取大） 黒田信二（呉工業高専） 小林丈広（京都市歴史資料館） 佐藤隆一（青山学院高等部） 鈴木栄樹（京都薬科大） 谷山正道（天理大） 塚本明（三重大） 羽賀祥二（名古屋大） 福井純子（立命館大） 松延眞介（東海大仰星高） 三沢純（熊本大） 母利美和（京都女子大） 戴田貫（関西大） 奈良勝司（立命館大・院） 平良聡弘（京都大・院）

1月17日 将軍家茂上洛をめぐる老中水野忠精の情報収集 佐藤 隆一

3月7日 幕末大和の豪商と雄藩 — 大和高田の村嶋氏一族と長州藩との物産交易 — 谷山 正道

5月16日 将軍進発要請期の江戸政権再考 奈良 勝司

6月20日 大久保利通と佐賀の乱 佐々木 克

7月18日 禁裏守衛総督と「一会桑政権」 佐々木 克

8月16日 安政期の幕府評議 — 大老井伊政権の再検討 — 母利 美和

10月17日 十九世紀末、京都における「知」の構築の現場 — 『平安通志』編纂をめぐる — 小林 丈広

11月14日 大名家と京都 — 長州藩を中心に — 岸本 覚

12月19日 「兵庫」開港の内外交渉過程 — 『兵庫大坂規定書』の締結過程を中心に — 平良 聡弘

フェティシズム研究の射程 班長 田中雅一

本研究会はフェティシズムあるいはフェティッシュをキーワードに文化横断的かつ領域横断的に、人とも、社会ともについての議論を展開してきた。理論的な関心から言えば信念のみで論じられているかに見える agency 論をなんとか克服していきたいと考えている。その意味でフェティッシュ論はなお、これまでの研究成果である主体や自己につい

ての議論を継承している。考えられるアプローチは宗教学、経済学、歴史学、精神分析、性科学、フェミニズム研究、物質文化論など多岐にわたる。4年目になってようやく芸術にたどり着くことができた。

班員 大浦康介 菊地暁 小牧幸代 高木博志 竹沢泰子 田中祐理子 Sabine Frühstück（以上所内） 足立明 田辺明生（以上 AA 研究科） 速水洋子（東南アジア研） 松田素二（文学研） 宇城輝人（福井県立大） 岡田浩樹 細谷広美（以上神戸大学） 春日直樹（大阪大学） 窪田幸子（広島大学） 斎藤光（京都精華大学） 佐伯順子（同志社大学） 田村公江（龍谷大学） 中谷文美（岡山大学） 箭内匡（天理大学） 池亀彩 石井美保（以上学振特別研究員） 岩谷彩子（人文研研修員） 佐藤知久（京都精華大・非常勤） 金谷美和（日文研研修員） 川村清志（大阪外大非常勤） 中谷純江（民博研修員） 後藤正憲（大阪大学大学院人間科学研究科） 藤本純子（大阪大学大学院文学研究科） 小池郁子 松嶋健 宮西香穂里 李雯文（以上京都大学大学院人間・環境学研究科）

1月20日 「生きられる文化」としての社会運動 有蘭 真代

2月3日 異性装とフェティシズム（？） 佐伯 順子

2月17日 消費としての蒐集：ヒトとモノの関わりをさぐる 長尾 晃宏（名城大学）

3月3日 ルネッサンスのフェティシズム、エロスと呪術 岡田 温司（京大人環）

3月17日 西アフリカ、ベナン共和国南西部村落における子供・もの・霊の相関 田中 正隆

4月21日 近代日本における知識と権力 サビーネ・フルシュティク（京大人文研外国人客員研究員）

5月19日 記憶と景観：米国インディアナ州の博物館を事例に 田川 泉（広島大学大学院）

6月2日 方法としてのフェティシズム：考現学とその“末裔”から 伊藤 遊（大阪大学大学院）

6月16日 人とモノの関わり：アクター・ネット

- ワーク論とフェティシズム現象
足立 明
- 7月7日 モノとコトバのはざま：社会的実践論
としての技術研究の可能性
大西 秀之（総合地球環境学研究所）
- 10月20日 物持ちの持ち物：大村しげコレクショ
ンからの検討 田口 理恵
（東京大学東洋文化研究所）
- 11月17日 贈与の名前：北インド・ムスリム社会
における贈与者／受贈者関係の諸相
小牧 幸代
- 12月1日 歪んだレンズ：祭壇～表象装置と身体
的インターフェース
港 千尋（多摩美術大学）

ヴェーダ後期の言語と宗教 — ヴァードゥーラ・アヌアーキアーナの研究 —

班長 井狩彌介

本研究においては、ヴェーダ後期の祭祀解釈文献（いわゆるブラーフマナ文献）のうち、言語的にも宗教的にもきわめて興味深く重要な文献である『ヴァードゥーラ・アヌアーキアーナ』をインド文献学各分野の専門研究者たちの参加のもとに定期的に会読し、このテキストの言語的特徴とヴェーダ祭祀思想史における位置付けの解明をはかってきた。

ヤジュルヴェーダの古学派であるヴァードゥーラ派の文献は、研究史上でつとに注目を浴びてきたにもかかわらず、基本資料となる写本の不備のためにその全容の解明が充分に行われないままに現在に至ってきた。近年に班長・井狩が南インドで発見した多数の新写本群に基づいて学界未知の文献を含む重要基本文献の本文批評の作成が現在進行中であり、研究史の新たな書き換えに至る知見が蓄積されつつある。本研究はその一環として、同学派文献のうち国際学界でもっとも要請の大きい本テキストを取り上げた。本年度末で『ヴァードゥーラ・アヌアーキアーナ』第二章アグニホートラ部分の検討を終え、その研究成果として、批判テキストと詳細な訳注を施した英訳の作成を進めている。

班員 藤井正人 船山徹 堂山英次郎（以上所内）徳永宗雄 赤松明彦 ウェルナー・クノーブル（以上文学研究科）天野恭子 榎本文雄（大阪大）

梶原三恵子（京都大・非常勤） 桂紹隆（広島大）
小林正人（白鳳大） 後藤敏文（東北大） 杉田瑞枝（京都大・非常勤） 土山泰弘（埼玉工大） 手嶋英貴（京都精華大） 野田智子（日本学術振興会） 林隆夫（同志社大） 増田良介（大阪外大・非常勤）
松田祐子（九州龍谷短大） 村上昌孝（大谷大・非常勤） 八木徹（大阪学院大） 山下勤（京都学院大） 渡瀬信之（東海大） 大島智靖（大阪大文院）
永田啓介（京都大文院） 井田克征（金沢大文院）

1960年代の研究

班長 富永茂樹

1960年代は、われわれの生活と意識がそれまでのものから大きく変化した時代であった。しかもその変化は世界的な規模で生じたこと、また生活のさまざまな領域において認められること、さらに日本についていうなら、明治維新や第二次世界大戦後の変化を上回るものであるかもしれないことさえ予想される、そのような変化である。自身がそのいくぶんかを生きた時代、また現在からほど遠くない時代について何ごとかを語り、結論を抽出するのは決して容易なことではない。だが1960年代をつうじての世界の変貌が、今われわれのいる世界に直接につながっているかぎりにおいて、その腑分けを行うことはわれわれ自身を知るうえでぜひとも必要な作業でもある。この共同研究は、以上のような認識に立って、政治史や経済史もさることながら、日常生活から学術や芸術にまでいたる多様な側面での世界の変化に注目して、また1940年代生まれの、いわば60年代を生きた世代から、70年代生まれの、つまりこの時代については語られた記憶しかもたない世代までが集まって進めてゆくものである。

班員 籠谷直人 加藤和人 佐々木克 田中祐理子 藤原辰史 山室信一（以上所内）伊從勉 大澤真幸 葛山泰央（以上人間・環境学研究科）加藤幹郎 大黒弘慈（以上総合人間学部）遠藤徹（同志社大）川崎博史（ホロニク）北垣徹（西南学院大）斎藤光（京都精華大）白鳥義彦（神戸大）鳴海邦碩（大阪大）成実弘至（京都造形芸術大）半田章二 疋田正博（以上シー・ディー・アイ）前川真行（大阪女子大）松本日之春（京都市芸術大）光永雅明（神戸市外語大）森口邦彦

(社団法人日本工芸会)

- 1月17日 『アニマル・マシーン』とその時代 — 近代畜産の成立 — 藤原
2月7日 “ふたり”の60年代 斉藤
2月21日 ナンセンスの進撃 — 笑いの60年代 — 森下 伸也 (ゲスト)
3月7日 三種の神器 正田
4月18日 60年代と17世紀 富永
4月25日 60年代のデザイン 川添 登 (ゲスト)
5月16日 記憶と記録の60年代 葛山
5月30日 主婦化の60年代 松澤 佳子 (ゲスト)
6月6日 族たちの60年代 — 都市と若者たち — 成実
6月20日 教育と人間の60年代 前川
7月4日 イギリスの「エコロジスト」たち 光永
7月18日 テレビ・スポーツ・理想のからだ 半田
9月19日 国民皆保険の成立 田中
10月3日 賈と純粹 — 宇野弘蔵をめぐって — 大黒
10月31日 60年代の日米繊維摩擦 籠谷
11月7日 中間総括、および今後の展望について 全員
11月21日 「流」の革命 — 60年代日本精神誌 (2) — 山室
12月5日 1960年代の日本における雇用関係の変化 ベルナル・トマン (ゲスト)
12月19日 1960年代の高等教育 白鳥

国家形成の比較研究

班長 前川和也

この研究班は、人類が経験したもっとも重要な営みのひとつである国家形成をあつかっている。班員が対象とする地域は東アジア (日本列島、朝鮮半島、中国)、西アジア (メソポタミア、イスラエル、イラン)、インド、オセアニア、北欧、南米アンデスにおよぶ。

またゲスト・スピーカーを招聘して班員の専門外領域 (たとえばエジプト考古学) にも視野を広げて

いる。われわれは、世界各地のさまざまなタイプの国家形成のプロセスを、考古学、歴史学、人類学の諸アプローチから解明しようとしている。かつて地球上で展開した複雑きわまりない諸プロセスを、単一理論によって斉一的に理解できるなどとは、われわれは、もはやおもっていない。かわってわれわれは、現存の諸理論がどこまで妥当しうるのか、それらをどのように修正すれば理論として存立可能かといった、いわば諸理論の「場の確定」作業を厳密に行なっている。同時にわれわれは、各報告のなかで提供される最新情報を研究班の共通知識としている。考古学や古代史では研究の細分化、専門化がすぎまじい勢いで進んでいるから、各報告にみえる情報整理が他分野研究者にとってもすこぶる貴重な財産となっているのである。2004年3月で個別報告を一応終了し、2004年度前半に総括、原稿準備の会合を定期的にもったうで、2004年度中葉に報告書のための原稿が提出される予定である。

班員 井狩弥介 小南一郎 岡村秀典 藤井正人 堂山英次郎 藤井律之 (以上所内) 吉井秀夫 伊藤淳史 (以上文学研究科) 田辺明生 (AA研究科) 石村智 下垣仁志 橋本英将 (以上京都大・文DC) 宇野隆夫 (国際日文研) 角谷英則 (津山高専) 河野一隆 (国立九州博物館設立準備室) 桑原久男 (天理大・文) 佐藤吉文 (総合研究大学院大・文化科学 DC, 民博) 関雄二 (民族学博物館) 寺前直人 (学術振興会特別研究員) 中谷正和 (総合研究大学院大・文化科学 DC, 日文研) 西江清高 (南山大・人文) 菱田哲郎 (京都府立大・文) 深澤芳樹 (奈良文化財研究所) 福永伸哉 (大阪大・文) 松木武彦 (岡山大・文) 森下章司 (大手前大・文) 渡辺信一郎 (京都府立大・文)

1月14日 威信財システムからの脱却

石村 智

1月28日 ナイル下流域における初期国家の形成 高宮いづみ (近畿大)

2月25日 古代メソポタミアの集団労働

前川 和也

3月11日 住居址からみたアンデスにおける「国家」 佐藤 吉文

3月25日 カウパング：ヴァイキング時代ノル

- ウェイの初期都市遺跡
D. Skre (Univ. of Oslo)
- 4月22日 西周統治体制と命の観念 小南 一郎
- 5月13日 古墳時代王権の権威基盤：二次国家形成における王権の外部依存性
福永 伸哉
- 5月27日 古代アンデスの初期国家：モチエの権力基盤
関 雄二
- 6月10日 地名と墳墓にみる北欧の「国家」形成
角谷 英則
- 6月24日 倭王権形成試論：中心生成プロセスから
下垣 仁志
- 9月9日 古代イランにおける社会組織の編成
堂山英次郎
- 10月14日 手工業生産からみた日本列島の国家形成
菱田 哲郎
- 10月28日 北魏皇帝の行軍再考 藤井 律之
- 11月11日 適応としてのラピタ人の拡散戦略
石村 智
- 11月25日 馬韓から百済へ 吉井 秀夫
- 12月9日 国家形成前夜の遺跡動態（その2）
伊藤 淳史
- 職員 大浦康介 岡田暁生 佐々木克 高木博志
高階絵里加 森本淳生 横山俊夫（以上所内） 吉田城（文学研究科） 松島征（総合人間学部） 柏木隆雄 北村卓 内藤高（以上大阪大） 小山俊輔 三野博司（以上奈良女大） 鶴飼敦子（人間・環境学研究科博士後期課程） 柏木加代子（京都市芸大） 小西嘉幸（大阪市大） 近藤秀樹（大阪教育大・非常勤講師） アンヌ・ゴノン（同志社大） 阪村圭英子（京都市芸大・非常勤） 島本浣（京都精華大） ジャック・ジョリー（英知大） 丹治恆次郎（関学大） 袴田麻祐子 佐野仁美（以上大阪大文学研究科博士後期過程） [海外協力者]：イヴ＝マリ・アリユー（トゥールーズ・ルミリエ大学） セシル・サカイ（パリ第7大学）
- 1月6日 アンドレ・マルローと日本
三野 博司
- 1月20日 エミール・ガレにおける高島北海の影響
鶴飼 敦子
- 2月3日 明治政府に送られたフランス評一元
在仏日本公館雇マーシャル氏の『政況報告雑纂』から一 横山 俊夫
- 2月17日 セヴィニエ夫人の『書簡集』にあらわれたフランス人の死生観と日本人の死生観
佐藤 洋子（ゲスト）
- 3月3日 フランス公使ロッシュと幕末の日本
佐々木 克
- 3月15日 日本少女像の誕生をめぐって一 華宵・梶牛・グルーズ 島本 浣
日本におけるルソー受容（1）一 人文研の共同研究をめぐって一
小西 嘉幸
- 4月7日 La Decouverte du Theatre japonais par les Francais
Jean-Jacques Tschudin
- 4月21日 日仏の「象徴の森」は呼応したか
宇佐美 斉
- 5月12日 東と西の雄鶏一 フランスに渡った川村清雄の《建国》一 高階絵里加
- 5月26日 異世界表象の諸相一 ロティ、荷風、ミショー、バルト一 大浦 康介
- 6月9日 日本における「ヴァレリー問題」（2）
- 日仏文化交渉の研究 班長 宇佐美齊
- 2002年4月から4年間の予定で実施されている共同研究である。日本人にとってのフランス文化、フランス人にとっての日本文化、このふたつを問うことから始めて、具体的なヒトとモノの交流を重視しながら考察をすすめている。そのうえで日仏両文化の相互的な交渉がもたらした豊かな創造性とその問題点を浮き彫りにしてみたい。時代区分としては、フランスでいえば第二帝政と第三共和政の時代、日本でいえば幕末維新期から昭和10年代あたりまでを想定している。フランスの文学や諸芸術を対象とする研究者のみならず、日欧比較美術史、日本文化史、比較文明史、社会思想史、あるいは宗教史を専門とする研究者にも加わっていただいている。また正規の職員としてではないが、必要に応じて海外からも複数の研究者の協力を得ている。
- 通常は隔週の月曜日、午後2時から6時までの時間帯に、口頭発表と討議を重ねている。

- 森本 淳生 把握・認識した中国・台湾・朝鮮の民族運動，共產主義運動，労働運動などの動向等々を，日本史・朝鮮史・台湾史・中国史の研究者による共同研究を通じて解明しようとするものである。また，中国・朝鮮側史料，欧米（特に英仏）諸国の史料などを利用して，中国・朝鮮政府の対応，中国人・朝鮮人の認識，欧米諸国の対応などについても検討を加えたいと考えている。
- 6月23日 ヴァレリーと日本との接点 丹治恆次郎 班員 高木博志 石川禎浩 村上衛 李昇燁（以上所内） 永井和（文学研究科） 浅野豊美（中大） 梶居佳弘（立命館大・非常勤） 桂川光正（大阪産業大） 近藤正己（近畿大） 副島昭一（和歌山大） 宗田昌人（文学研究科・院） 田中隆一（学術振興会特別研究員） 廣岡浄進（大阪大・院） 藤永壮（大阪産業大） 松田利彦（日文研） 李ジョンミン（中央大学・非常勤）（海外協力者） エリック・エッセルストロム（カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校博士候補） 辛珠柏（成均館大学） 鄭根植（全南大）
- 7月7日 『失われた時を求めて』の菊とジャポニスム 阪村圭英子
- 9月20日 日本とフランス 媒介者としての〈水の風景〉— 日本近代文学を中心に — 内藤 高 日仏戦前音楽交渉史 — 批判的俯瞰の試み 岡田 暁生
- 10月6日 岩野泡鳴とボードレール 北村 卓
- 10月20日 「反語的精神」の共振 — 林達夫とジャンケレヴィッチ — 近藤 秀樹
- 11月10日 「パリ」との距離感 — 宝塚・白井鐵造のレビューを例に — 袴田麻祐子 日本におけるシャンソンの受容をめぐって 松島 征
- 11月22日 ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』研究（1）— 西園寺公望による原歌翻訳を中心に — 吉川 順子 フロベールと日本趣味 柏木加代子
- 12月8日 高島北海『仏文詩画帖』とエミール・ガレ 1900 年万国博覧会資料 鶴飼 敦子
- 12月20日 木下杢太郎とフランス文化 吉田 城 太宰治とフランス文学 柏木 隆雄
- 領事館警察の研究** 班長 水野直樹 近代日本が朝鮮・中国との間に結んだ条約に規定された治外法権は，朝鮮と中国（東北地方＝満洲を含む）に日本の領事館警察なるものを生み出した。朝鮮では 1905 年の保護条約まで，中国東北地方では満洲国における日本の治外法権が撤廃されるまで，中国では汪兆銘政権期に治外法権が撤廃されるまで，各地の日本領事館に外務省から警察官が派遣され，様々な活動を行なった。在留日本人（後には台湾籍民・朝鮮人を含む）の保護・取り締まり，情報活動，相手国・欧米外交機関との折衝などである。
- 本研究は，近代日本と東アジアとの関係を考える上で重要な領事館警察の機構や活動，領事館警察が
- 1月15日 植民地的検閲の起源：1904～1910 年 鄭 根 植
- 1月22日 1920 年代の在「満洲」外務省警察 荻野富士夫（小樽商科大・ゲスト）
- 2月5日 イギリス外交文書にみる日本の在中国領事館警察 — 1920 年代以降に関する初歩的な紹介 — 梶居 佳弘
- 2月19日 佐野学の逮捕と上海領事館警察 石川 禎浩
- 3月5日 ソウル日本人居留地の形成と拡大 市岡 実幸（京大・院）
- 4月16日 上海フランス租界と朝鮮民族運動 水野 直樹
- 5月7日 日本帝国再編の起点としての共通法制定 浅野 豊美
- 5月21日 「対岸」における台湾抗日運動と在外公館 宗田 昌人
- 6月4日 「退韓令」に関する基礎的調査 — 19 世紀末～20 世紀初在朝日本人への在留禁止命令について 李 昇 燁
- 7月2日 日中戦争期の領事館警察の拡張について — 満州事変以後の華北・内モンゴ

	ル—	永井 和			古屋 哲夫
7月16日	1920年代の‘満洲’における領事館警察と韓人の民族運動	辛 珠 柏	4月11日	研究会1年—回顧と展望—	山本
9月17日	間島における領事館警察と朝鮮総督府			文史資料について	上田
10月1日	『外務省警察史』に見る中国本土の麻薬事情	桂川 光正	4月25日	紹介と書評	
10月15日	上海の領事館警察について—1930年代を中心に—	副島 昭一		孫継武・鄭敏主編『日本向中国東北移民的調査与研究』2002年	坂部
11月5日	間島の領事館警察と「親日団体」朝鮮人民会—1920年代を中心に—	廣岡 浄進	5月9日	高楽才『日本「満洲移民」研究』2000年	小都
11月19日	1910年代朝鮮総督府の中朝国境接境地帯における治安体制の構築	松田 利彦	5月23日	杉野忠夫—ある海外拓殖運動者の生涯—	藤原
12月3日	ワシントン会議と中国治外法権撤廃問題	長沢 一恵（関西大・非常勤）	6月13日	「中国残留日本人」の形成に関する一考察—後期集団引揚げをめぐる日中交渉を中心に—	南
12月10日	間島における外務省警察			想起と表象そして歴史叙述—満洲体験の重層化としてのシベリア—	山室
	荻野富士夫（小樽商科大学・ゲスト）		6月27日	紹介と書評	
				柳沢 遊『日本人の植民地体験—大連日本人商工業者の歴史』1999年	上田
記憶と歴史—満洲縁故者の場合—				石堂清倫『大連の日本人引揚げの記録』1997年	山本
	記憶の歴史化について、個人的記憶と集团的記憶について、オーラル・ヒストリーとライフ・ストーリーについて、広義の歴史学各分野において近年広く関心を集めている。この大きな問題を、引揚げ体験を中心とする満洲縁故者の場合という具体例に引き付けて考えようとする。		7月11日	満洲開拓団へのまなざし—開拓研究所資料を中心に—	猪股
	日本植民地史、中国現代史、歴史社会学、政治史、各分野の研究者の参加を得て、隔週金曜日に定例研究会を開催している。2年間の研究会ののち、成果を小さな論文集に纏める予定である。		9月26日	語られる「祖国の記憶」—中国残留婦人を中心に—	蘭
	班員 藤原辰史 山室信一（以上所内） 蘭 信三（留学生センター） 西村成雄（大阪外大） 松本俊郎（岡山大・経） 猪股祐介（東大・院） 上田貴子 小都晶子（以上大阪外大・院） 坂部晶子（日本学術振興会特別研究員） 南 誠（京大・院）		10月10日	20世紀前半の中国東北地方在住日本人建築家の見聞と建築設計—「記憶と歴史」に関する建築学的考察—	西澤 泰彦（名古屋大学）
1月24日	東北接収をめぐる国史館資料について	西村	10月24日	戦後中国東北政治の正統性問題—東北接収と内戦にいくえ—	西村
2月14日	中国東北地区における「満洲」に関する記憶の表象	坂部	11月14日	満洲はどう語られたか	古屋 哲夫
2月28日	満洲難民記録をめぐる若干の整理—藤田繁『草の碑』を中心に—		11月28日	記憶と歴史—都市民の場合—	上田
			12月12日	満洲移民における引揚げ—岐阜県郡上村開拓団の事例を中心に—	猪股
			文明と言語		
				人間社会が安定し、しかもそれが文（あや）をなし明らかなる状態に赴くとき、言語が変容しつつはたす役割は大きい。その諸相を、さまざまな事例研	班長 横山俊夫

究を通じて明らかにするとともに、現代の専門細分化による言語の流通力のおとろえが社会にもたらしめている閉塞状況にたいして、その解決の道を、班員の協同により模索し、提言することをめざしている。

現在、班員それぞれの研究報告のほかに17世紀の色道書『難波鉦』を輪読、閉鎖安定空間にみられる人間行動と話し言葉の質を多方面から検討している。

班員 宇佐美齊 岡田暁生 加藤和人 金文京 古勝隆一 小林博行 武田時昌 田中祐理子 森本淳生（以上所内） 山極壽一（京大理学研究科） 遊磨正秀（京大生態学研究センター） 荒牧典俊（大谷大） 遠藤彰（立命館大） 後藤静夫（国立文楽劇場） 廣瀬千紗子（同志社女子大） 深澤一幸（大阪大）

1月25日 『難波鉦』 香車〜意気落 横山
私小説論争の行方 ― 〈私〉の戦前戦後 ― 森本

2月8日 『難波鉦』 松浦舟〜滝水 田中
東西カラクリ概論 後藤

2月22日 『難波鉦』 諸手縄〜釈語 廣瀬
曖昧の言語力 宇佐美

3月8日 『難波鉦』 恋請〜身をしる雨 荒牧
金蚕考 武田

3月15日 『難波鉦』 忍返し 深澤
官の意図、民の意図 遊磨

4月26日 『難波鉦』 誰袖 遊磨
食卓の進化論 山極

5月10日 『難波鉦』 打替 田中
カプセルの中の科学 ― スペンスー＝ヴァイスマン論争 ― 小林

5月24日 文化研究創成フォーラム：〈音と調べ〉をめぐって
音楽を語る言葉／言葉としての音楽 岡田

お経を唱えるということ
（ゲスト）梶田真章氏

コメント 宇佐美

5月25日 見聞会 清水寺成就院
「言」あ・うん語り

（対談）白川 静氏／小南一郎氏

6月14日 『難波鉦』 残花 森本
ユクスキュルの Umwelten への遠足

― 自然の対位法を見抜き「総譜」を描くこと ― 遠藤

6月28日 『難波鉦』 袖印 山岸 敦
文楽三人遣い分析試論（続） 後藤

8月21日 見学会 国立民族学博物館
特別展「西アフリカおはなし村」
（案内）江口一久氏

10月4日 『難波鉦』 蚤小舟 小林
生命科学のこの頃 ― クローン、ヒトゲノム、そして社会とのコミュニケーション ― 加藤

10月18日 『難波鉦』 浮萍 岡田
新たな視点から考察するロボット
（ゲスト）高橋智隆氏

11月1日 『難波鉦』 妹背煤 武田
架空の問答を読む 古勝

11月22日 『難波鉦』 夕煙 後藤
「ロマン主義医学」とは何か 田中

12月6日 『難波鉦』 十五夜 宇佐美
平賀源内の浄瑠璃 廣瀬

身体近代 班長 菊地 暁

「身体」。人が生まれ出るとともに手に入れ、老い、病み、死に至るとともに手放す生命の容れ物。食べる、寝る、遊ぶ……あらゆる行為の起点となる原初の道具。喜、怒、哀、楽……あらゆる感性の発端となる原初のメディア。もっとも身近な、であればこそ、もっとも不透明な、人間の存在基盤。

「近代」。アメリカ発見やフランス革命といった歴史的事件によって区画される年表上の一部分。世俗化や議会制や市場経済といった指標で同定される歴史的進歩の一段階。合理性や客観性によって特徴づけられる歴史的精神の一形態。そういったもの全てを包み込みつつ、その何かを裏切りつつ、それでいて、我々を根底的に規定し続ける、現代人の存在環境。

「身体」を「近代」で考える。「近代」を「身体」で考える。二つの曖昧模糊としたカテゴリーの交点から、その双方を照射しうるような新たな視点を模索する。共同研究「身体近代」班の目論見は、さしあたり、そんなふう表現できるかもしれない。

冷静に考えれば明らかに無謀なこのプロジェクトには、にもかかわらず、その無謀さを認めることで拭い去ることのできない、ある感覚が蠢いている。その感覚をあえて言葉にするなら、「知」の「閉塞感」への「抵抗」だ。

今日、「知」の環境が深刻な危機にさらされていることは、今更いうまでもない。「知」のインフラをめぐるあらゆる決定が「資本の論理」と「統治の論理」に回収され、その帰結が、取り返しのつかない荒廃をもたらすことは、おそらく間違いない。そしてそのことが、「知」の環境のみならず社会全体の混乱を招くことも、おそらく間違いない。無力感。焦燥感。倦怠感。それらは、決して理由のないことではない。

状況への対処法はさまざまだ。状況の甘受と黙認。勝ち組への転向や追従。政治的反抗。等々。

ここであえて問題にしたいのは、「知」の生産現場に身を置く者として、その現場性にこだわり続けるとするなら、一体いかなる対処が可能なのか、という問いだ。そして、ここでの作業仮説的回答が、「やりたいことをやる」、換言すれば、「欲望」に導かれた「知」の可能性を再発見する、ということである（＝「欲望原理主義」）。

そして、もう一つの作業仮説が、「知」を伝える他者として「アマチュア」を想定すること、その齟齬に溢れる対話を通じて、個々のディシプリンやアカデミズムに閉じがちな「知」の言葉を鍛え直し、「大学（university）」という装置が本来要求したはずの「普遍性（universality）」においてコミュニケートすることである（＝「方法的アマチュアリズム」）。

誤解を恐れずにいえば、「身体近代」というテーマ、そして「共同研究」というメディアは、そのための「依代」に過ぎない。とはいっても、この「依代」が全く無作為に選ばれたわけではない。実は大いに意味がある。あまりに身近で、あまりに自明で、あまりに個別的な「身体」。それを対象化し、言語化し、コミュニケートすることができるか否かが、個々のディシプリンやアカデミズムを含めて、「知」の可能性の試金石となる。そう考えるからだ。

本年度は上記の問題意識に基づき、読書会形式の研究を中心、基礎知識の共有化を試みた。

班員 大浦康介 岡田暁生 加藤和人 小林博行 小

牧幸代 坂本優一郎 佐野誠子 高階絵里香 竹沢泰子 田中祐理子 谷川穰 東郷俊宏 堂山英次郎 藤原辰史 守岡知彦 森本淳生 山岸敦（以上所内）

4月9日 神戸市立博物館「ヴィクトリアン・ヌード」展見学

4月23日 これまでのあらすじ／これからのみちすじ 菊地

医学的身体の基礎知識その一 東郷

5月14日 医学的身体の基礎知識その二 東郷

5月28日 ワコール企業博物館「Museum of beauty」見学

6月11日 こころとからだの情報と1—人工知能の夢と挫折— 守岡

6月25日 遺伝子発現パターンとしての“からだ” 山岸

7月9日 読書会：生殖医療を考える 菊地

7月23日 医学的身体の基礎知識その三 東郷

10月8日 身体技法を考える—マルセル・モース「身体技法」を読む— 菊地

10月22日 精神分析的身体論の基礎知識—フロイトにおける二、三の問題圏—

立木 康介（ゲスト）

11月12日 ヒンドゥー・ナショナリズム運動における身体のパリティクス—RSS（民族奉仕団）のシャーカ活動をめぐる— 中島 岳志（ゲスト）

11月26日 鉄道史からみた身体・時間感覚の変化—シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史』を読む— 佐野

12月10日 原節子、満洲に行く—日独合作映画『新しき土』にみる〈日本人〉の身体— 藤原

人種の表象と表現をめぐる学際的研究

班長 竹沢泰子

2003年4月から始まった本研究会は、その2年前から進めてきた科学研究費基盤B（2）「人種概念と実在性をめぐる学際的基礎研究」（代表 竹沢泰子）によるとくに人種概念をめぐる共同研究を土台としている。しかし人種が社会的構築物であることが露呈されても、なぜ人種が、社会諸制度か

ら医療、教育、嗜好・美意識にいたるまで、リアリティをもつかは、概念とあわせて考えなければならぬ問題である。そこで本研究会では、表象と表現をキーワードに、文化人類学、歴史学、文学、美学、自然人類学、生命科学などの多領域にまたがる班員から構成し、学際的な研究を進める。表象のみならず表現を含めるのは、主体としての当事者の能動的側面を看過しないためである。なお12月の研究会では、日系アメリカ人をテーマに国際シンポジウムを開催し、そこでも人種化とアイデンティティの問題などを取りあげた。次年度は概念から表象へさらにシフトして共同研究を進める予定である。

班員 石川禎浩 大浦康介 加藤和人 小関隆
小牧幸代 高木博志 高階絵里加 田中雅一 藤原
辰史（以上所内） 蘭信三（留学生センター） 片山
一道（理学研究科） 松田素二（文学研究科） 田辺
明生（アジア・アフリカ地域研究研究科） 石橋純
（東京大学） 井野瀬久美恵（甲南大学） 川島浩平
（武蔵大学） 北原恵（甲南大学） 貴堂嘉之（一橋
大学） 栗本英世（大阪大学） 黒川みどり（静岡大
学） 斎藤成也（国立遺伝研究所） 坂野徹（東京理
科大学・非常勤講師） 坂元ひろ子（一橋大学） 崎
山政毅（立命館大学） スチュアート ヘンリ（昭
和女子大学） 富山一郎（大阪大学） 渡辺公三（立
命館大学）

4月18日 人種の表象と表現をめぐって：研究会
の趣旨 竹沢

人種と表象分析：ベネトン広告を例に
北原

5月10日 「帝国日本の人種および人種主義」（富
山論文）の報告とコメント

富山・小関

「人種よさらば」（斎藤論文）へのコメ
ント 加藤・川島

5月11日 「中国史上の人種概念をめぐって」（坂
本論文）へのコメント 石川

「人種主義と部落差別」（黒川論文）

小林 丈広・田辺

「人種主義的アフリカ観の残影：「セ
ム」「ハム」と「ニグロ」」（栗本論文）
へのコメント 石橋・大浦

6月14日 西洋美術における異邦人表現の伝統：
〈東方三博士〉の図像をめぐって 高階
書評 Bell Hooks, *Black Looks :
race and representation*. Boston :
South End Press, 1992. 竹沢

7月12日 人種概念の普遍性を問う：問題提起
竹沢

黒人性について 松田

7月13日 維新期、天皇をめぐる聖性と貴種と賤
高木

日本人類学と「人種」 坂野

10月11日 「人種」議論にかんする覚書 井野瀬
「グレイター・ブリテン」という快
感：19世紀イングランドにおける人
種論の展開 小関

11月8日 アメリカスポーツと人種：問題の所在
と可能性 川島

ベネズエラの人種差別に関する開かれ
た議論に向けて：マスメディアにみる
「黒人」の排除とステレオタイプ化さ
れた登用 石橋

11月9日 米軍における人種とジェンダー 田中
人種とボルノグラフィー 大浦

12月10日 国際シンポジウム「ニューウェーブ
21世紀の日系アメリカ人研究」

第一部 Japanese American Studies in the
Rearview Mirror

Universalism and Exceptionalism
in Japanese American Studies:
Towards a Historiography.

Lon Kurashige

(University of Southern California)

Comments. Yasuko Takezawa

第二部 Migrating to and from Japan

Writing Between Two Nations:
Okina Kyuin's Sokoku ni Kaeru Ki
or a Record on Returning Home.

Kristina Vassil

(University of Michigan)

Once and Again: Japanese
Americans Return to Japan:

Preliminary Findings.

Arthur Nomura

(Loyola Marymount University)

Crossing National Boundaries and
the Color Line: Contrastive Study of
Houston's 'Tea' with Ariyoshi
"Hishoku."

野崎 京子 (京都産業大学)

第三部 Conceptualizing 'Race' and
'Community' in the United States

Placing the Japanese Immigrant
Community in the Time-Space of
Early Twentieth-Century American
West: The Nexus between the
Japanese Association and the Local
Economy. 米山 裕 (立命館大学)
Ethno-racial Formation of Japanese
Immigrant Community in Los
Angeles: A Sociological Perspective.

南川 文里 (一橋大学 PD)

コメント 吉田 亮 (同志社大学)

第四部 Globalization and the Future of
Japanese American Studies

Brian

Masaru Hayashi

(Kyoto University)

Masumi Izumi

(Doshisha University)

Yasuko Takezawa

(Kyoto University)

東方学研究部

中国美術の図像学

班長 曾布川寛

古代、中世の美術において表現されたものは全て
象徴的意味内容を有しており、それが何を表してい
るかを知らずして作品の理解はあり得ない。作品
の背景には神話伝説、宗教的義軌、社会的状況な
どがあり、それらを踏まえて理解することが要求さ
れる。我々は中国の古代、中世美術を取り上げるに
当たり、図像学の見地から考察を試みる。主たる対
象は考古学的出土文物と、石窟寺院などの佛教美術

であり、中国のみならず、インド、朝鮮、日本を含
めて考察する。また、『鉄網珊瑚』画品を取り上げ、
会読を行った。

王玄策研究

班長 高田時雄

王玄策は唐の太宗から高宗の時代にかけて、数度
にわたり正使あるいは副使としてインドに赴き、中
印文化交流史に足跡を残した。その著とされる『中
天竺国行記』は現在では散佚して、『法苑珠林』『諸
経要集』『釈迦方誌』などに断片的な記載が見られ
るのみである。本研究班では、王玄策の使節に関す
る文献資料を集成し、読み解くことによって、当時
の中国からインドにわたる地域の歴史・宗教・言
語・文化などの情報を引き出すことを目的とする。
本年度で、馮承鈞「王玄策事輯」(『西域南海史地考
証論著彙輯』所載)の会読を終了した。今後は資料
の整理およびテキスト校訂・訳注作成等の作業を進
めていく予定。隔週の月曜日に漢字情報研究セン
ター会議室で開催。

元代の社会と文化

班長 金 文京

前年度にひきつづき本年度も『事林広記』と『元
刊雜劇三十種』の読解、訳注作成を並行しておこ
なった。なお『事林広記』人事類の訳注を『東方学
報』第75冊に発表した。

中国文明の形成研究班

班長 小南一郎

本年は、王国維『観堂集林』のうち、礼器や礼制
に関わる部分を、訳注を作りながら読んだ。古器物
の名称を定めるに際して、文献資料と出土文物の銘
文などをいかに組み合わせて用いるかを論じた部分
である。王国維が出した結論について、現在からは
いくつも疑問が呈されているが、方法論としては学
ぶべきところが多い。こうした会読を行ったほか、
研究報告がなされた。

中国技術の伝統

班長 田中 淡

「中国技術史の研究」に引き続いて、1996年から、
中国技術の伝統と特質について検討を加え、2003
年3月に結束した。生活科学技術を中心とし、特定
の時代・分野に偏重せず、技術と科学の相関、技術

者と社会、生活科学の特質、少数民族の技術などに関わる科学・技術史の諸分野を視野に入れた。会説テキストとして前研究班から引き続いて元・王禎の『農書』農器図譜をとりあげ、すでに当初予定の範囲を読了し、並行して技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を随時おこなった。

この間の共同研究の会説から発展した成果として、中国歴代造園家にかんする文献史料を蒐集、校勘を加え、建築庭園名・引用文献・植物名・人名の索引を附した史料集『中国古代造園史料集成—増補哲匠録疊山篇 秦漢—六朝』（田中淡・外村中・福田美穂共編、中央公論美術出版版、2003年5月）を公刊した。

本研究期間の研究成果は、論文集として近く発表すべく、原稿をとりまとめ篇集作業にとりかかっている。また王禎『農書』の譯注は、多岐にわたる内容から、かなり時間を要することになるであろうが、近い将来の刊行を目指して、修訂を始めている。

中国の生活空間と造形

班長 田中 淡

中国の伝統的な生活空間とそれに直截的に関わる造形、すなわち具体的には住まい、宮殿、庭園、あるいは家具配置、室内空間、儀礼等々の諸相をとらえて、その特質を探る。時代・地方を限定せず、また建築空間に限らず、精神空間を対象に含め、中国学の他の分野および東アジア、周辺地域の専門家の参加を得て、当面2年の実験的研究として発足する。班員共通の会説テキストとしては、明方以智『通雅』宮室をとりあげる。

三教交渉の研究

班長 麥谷邦夫

本研究班では、元劉大彬編の『茅山志』録金石篇の会説を進めている。今年度は、卷二十五「宋天聖皇太后受上清籙記」までを読了した。9月以降は、報告書の出版に向けて研究発表を行った。

三国時代の出土文字資料

班長 井波陵一、富谷至

本研究班は、当初の目的であった本研究所蔵の魏晉時代文字拓本の会説を終え、その成果として図版・釈文等を公表すべく、班員が担当・提出した原稿の整理を開始したところである。

また、拓本会説と並行して会説を続けてきた張家山漢簡・二年律令は、その三分の一程を読了、その成果として訳注を東方学報に公表した。

なお、当研究班で会説している拓本は、本研究所附属、漢字情報研究センター HP において公開されている。

* 石刻拓本資料 <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/>

中国近世社会の秩序形成

班長 岩井茂樹

中国近世社会の秩序形成にどのような特質を見いだせるか。2000年度から3年計画で発足したこの研究班では、このいささか漠とした課題をめぐり、文化史、社会史、制度史などさまざまな分野の専門家がそれぞれの研究構想と分析視角を提示して意見を交換することをおこなってきた。人びとの行為と認識が安定した秩序にむかって収斂したり、既存の秩序への不同意によってそれを発散させたりする場を、どのような資料をもちい、どのような語り口によって描きだすか、報告者のそれぞれが技を披露し、相互に刺激を得ることができたように思う。現在、報告論文集を印刷中である。

「中国近世法制資料の研究」班

班長 岩井茂樹

本年度から新たに発足したこの研究班では、徽州文書中の明代裁判関係文書を中心とする法制資料を会説しながら、紛争解決の過程についての知識を獲得し、研究方法を模索することを目指している。徽州文書中の裁判関係文書は、1994年に本研究所に外国人研究員として滞在された周紹泉先生（中国社会科学院歴史研究所）がその整理と出版を企図されたものである。不幸なことに、周先生はこの仕事を完成することなく、2002年9月逝去された。周先生が残されたファイルをもとにして、その増補と綿密な校訂を完成することについて、中国社会科学院歴史研究所の阿風氏に相談したところ、賛同を得るとともに、写真版では判読不可能な箇所を原文書によって確認する作業と、未入力の方書の入力作業を阿風氏が引きうけて下さることになった。本研究班では、この阿風氏の作業を土台として、文書の釈読と厳密な校訂を進めつつある。

漢字情報基礎論の試み

班長 武田時昌

本研究会は、パソコンの普及、書物の電子テキスト化やインターネットによる交信といった情報の形態の変容が急速に進む時代状況に即応して、中国学研究の学問的環境を新たに整備するために、漢字情報のあり方や諸問題について中国学と情報学の双方の専門的な立場から検討を加えている。文化的伝統との連続性を保有しながらこれまでの研究方法論を発展的に継承した質の高い研究システムの構築するためには、欧米型の言語と思考を基盤として開発されてきたコンピュータ処理法に依存するだけでは限界がある。したがって、東アジア世界の漢字情報を有効に活用するための基盤作りが、緊急の課題として浮上してきているように思われる。その試みを推進するうえで、どのような可能性と問題点があるかについて、技術開発、研究システムから人材養成に至る多方面において討議することを中心的な考究課題としている。本年は、マークアップ等によるデータベース構築、コンピュータ処理によるテキスト解析等について、実験的な試みを行っている研究者を講師に招いて研究発表会を開催し、従来の資料学から漢字情報学へとグレードアップするうえでの諸問題を討議した。また、データベース作成やテキスト解析のための様々な技法を学習する作業部会を随時開催し、多種多様な文献資料を対象としてデータベース化の実験を行った。

中国近代化の動態構造

班長 森 時彦

近代における中国文明と西洋文明の接触が中国の社会構造にいかなる変動をもたらしたかという問題を、政治・経済・文化などさまざまな専門分野から多角的に考察することを目的として1998年に始まった本研究班は、2003年3月をもって終了した。この5年の間に行われた報告は延65回を数える。本年度は、現代を強く意識した研究報告が行われ、次の研究班へ連続させていくのに相応しいものとなった。なお、本研究班の成果は14篇の論文集として公刊予定である。

20世紀中国の社会システム

班長 森 時彦

従来、中国近代を対象とする研究班では、19世

紀後半から20世紀前半を主たる対象としてきた。現在、中国各地の档案馆で資料公開が進み、多様な形式の現地調査も行われる中で、中華人民共和国成立後を含めた20世紀後半をも歴史研究の対象とする時期が到来しつつある。かかる現状を前にして、本研究班は、清末から現在にいたる100年間をタイムスパンとして、その間における中国の社会システムの変動を多様な側面から検討することを目的とし、本年4月よりスタートした。本年度はなお清末から20世紀前半を対象とする各分野の報告が多くを占めたが、今後はさらに、20世紀後半により一層多くの議論が展開していくことが期待される。

客 員 部 門

近代京都研究

班長 丸山 宏

かつての首都としての文化の長い「伝統」と、近代の一地方都市という社会・経済的現実との相克が、近代京都の歴史を織りなしてきた縦糸と横糸と考えれば、「伝統」と現実の互いにずれた都市性格をいかに調整するかが明治以来現在まで京都の実際の政治的課題であった。このずれのなかに、近代京都のさまざまな問題への糸口が潜んでいると思われる。「近代の歴史都市としての京都」についての基本的な諸問題を総合的に論じ、さまざまな分野の具体的な主題を互いに論じながら、近代現代の京都の根本問題を見通す視座を形成したい。

班員 大原嘉豊 菊地暁 金文京 高木博志 高階絵里加 谷川穰 水野直樹（以上所内）天野太郎 伊従勉 金坂清則 藤原学 山田誠（以上人間環境学研究科）小林丈広 秋元せき（以上京都市歴史資料館）イ・ヒャンス（京都造形芸術大・非常勤）石田潤一郎 笠原一人 中川理 並木誠士 日向進（以上京都工芸繊維大）井上章一（日文研）岡村敬二（京都学園大）長志珠絵（神戸市外大）小野健吉（奈良文化財研究所）小野芳朗（岡山大）黒岩康博（文学研究科・院）才津祐美子（日文研 COE）坂口さとこ 清水愛子 山田由希代（以上京都工芸繊維大・院）鈴木栄樹（京都薬科大）高久嶺之介（同志社大）田島達也（京都市立芸大）中村武生（佛教大・非常勤）原田敬一（佛教大）

人 文 学 報

福井純子（立命館大・非常勤） 福島栄寿（真宗大 谷派教学研究） 芳井敬郎（花園大）	近代朝鮮の政治と社会 在日米軍を中心とする軍事共同体の 人類学的研究 文学理論の研究 ヴェーダ文献の生成と伝承の研究 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク	水野 直樹 田中 雅一 大浦 康介 藤井 正人
4月19日 近代京都研究再考に向けて ― 幹事報 告 ― 伊従 勉・丸山 宏 高木 博志		
5月10日 十九世紀末京都における「知」の構築 の現場 ―『平安通志』編纂をめぐっ て― 小林 丈広	近代天皇制の文化史的研究	籠谷 直人 高木 博志
6月21日 三大事業の形成 ― その政策環境と政 策主体 ― 鈴木 栄樹	人種・エスニシティ論 近代日本の芸術と西洋	竹沢 泰子 高階絵里加
7月19日 京都の近代庭園 小野 健吉	現代社会における生物学・生命科学	加藤 和人
9月21日 軍都東舞鶴のフィールドワーク	音楽におけるロマン派とメロドラマの音楽	
9月22日 舞鶴の赤煉瓦建築 中川 理		岡田 暁生
10月18日 長岡宮大極殿跡と地域社会 玉城 玲子（向日市文化資料館） 京都御土居堀の近現代 ―「勸農」・都 市計画・史蹟保存― 中村 武生	19世紀末イギリスのポピュラー・ コンサヴァティズム ポール・ヴァレリーと20世紀の思想 江戸時代天文暦学の文化史的研究	小関 隆 森本 淳生 小林 博行
11月8日 日本近代の展覧会における古美術 ― 明治13年第1回観古美術会と明治15 年第1回内国絵画共進会をめぐって― 並木 誠士	南アジア・ムスリム社会の社会構造 近代日本民俗誌システムの研究 近世ヨーロッパの国際金融研究 古インド・イラン語の研究	小牧 幸代 菊地 暁 坂本優一郎 堂山英次郎
12月20日 堂上公家の町人地における屋敷地集積 過程とその居住形態 ― 久世家を例と して― 登谷 伸宏（工学研究科・院） みやこのごみ事情 小野 芳朗	近代西洋医学発展史研究および身体論 ナチス・ドイツの農業政策 近代日本における教育／教化／宗教の関係史	田中祐理子 藤原 辰史 谷川 穰

東方学研究部

Ⅱ 個 人 研 究

人文学研究部

「日本植民地帝国」の経済史的研究	山本 有造	近代中国の綿紡織業	森 時彦
19世紀における明治維新	佐々木 克	中国古代の伝承文化研究	小南 一郎
古代インド・ヴェーダ祭式の構造と 歴史的展開の研究	井狩 彌介	中国美術の様式と意味	曾布川 寛
シュメール行政・経済文書の研究	前川 和也	中国建築の様式・技法・空間	田中 淡
フランスの詩学	宇佐美 齊	道教思想研究	菱谷 邦夫
前近代日本の文明史的研究	横山 俊夫	敦煌写本の言語史的研究	高田 時雄
近代東アジアにおける日本の法と政治	山室 信一	中国古代中世の法制	富谷 至
フランス革命と近代的主体の成立	富永 茂樹	中国の小説、演劇及び説唱文学の歴史	金 文京
		清代の文化と社会	井波 陵一
		中国科学の思想史的考察	武田 時昌
		近代中国の財政と社会	岩井 茂樹
		先秦時代の金文	浅原 達郎
		古代中国の考古学研究	岡村 秀典

川西走廊の漢藏諸語の記述言語学的研究

学が提示するもの

加藤 和人

池田 巧

インド・中国における仏教の学術と実践

開所 74 周年記念公開講演会

船山 徹

2003年11月 6 日

於 本館大会議室

文字コード理論

安岡 孝一

日本民俗写真史ノート 菊地 暁

イスラーム東漸史の研究

稲葉 穂

中国古代法が語るもの 宮宅 潔

仏教研究知識ベースー 禅仏教を例として

図像からみた古代メソポタミアの王権

ウィッテルン, クリスティアン

前川 和也

中国共産党史の研究

石川 禎浩

秦漢時代の制度史

宮宅 潔

清代の道教龍門派の歴史及び内丹の研究

漢字情報研究センター講習会

エスポジト, モニカ

・2003年度漢籍担当職員講習会(初級)

ムガル朝時代の歴史叙述の研究

真下 裕之

第1日(10月6日)

中国隋唐期における疾病認識

漢籍について

ー『諸病源候論』を軸にー

東郷 俊宏

名古屋大学文学研究科教授 井上 進

魏晋南北朝時代の注釈学

古勝 隆一

漢籍目録の構造ー 漢籍整理の基礎

中国近世の国家支配の研究

古松 崇志

文学研究科助教授 宇佐美文理

文字定義情報に基づく文書表現系に

カードの取り方ー 漢籍整理の実践

関する研究

守岡 知彦

第2日(10月7日)

客家語およびその周辺言語の記述研究

中西 裕樹

工具書について

中国仏教絵画の研究

大原 嘉豊

富山大学人文学部助教授 森賀 一恵

中国古代中世の官制史

藤井 律之

漢籍目録カード作成実習

モンゴル時代の文化政策と出版活動

宮 紀子

第3日(10月8日)

近代華南沿海地域の社会経済変動に

文字コードとテキスト処理の歴史

ついで研究

村上 衛

ウィッテルン, クリスティアン

中国魏晋南北朝志怪の成立背景

佐野 誠子

目録検索とデータベース検索 安岡 孝一

漢籍データベースについて

高田 時雄

漢籍データ入力実習(1)

事業概況

夏期公開講座

〈人文学と生命(いのち)〉

2003年 7 月 於 本館大会議室

4 日 霊魂のゆくえー 魂の古代と現代

小南 一郎

古代インドの生と死の観念ー ヴェー
ダの祭式世界から

井狩 彌介

5 日 皮膚ともぐさの間にあるものー 伝統

医学にみる「からだ」と「いのち」

東郷 俊宏

問い直される生命観ー 現代の生命科

第4日(10月9日)

漢籍目録を読む

井波 陵一

漢籍データ入力実習(2)

第5日(10月10日)

NII 総合目録データベースと全国漢籍データ
ベース

国立情報学研究所教授 宮澤 彰

実習解説

梶浦 晋

・2003年度漢籍担当職員講習会(中級)

第1日(11月10日)

四部分類概説

宮宅 潔

中国目録学史(1)

時代状況と出版傾向の関係について

文学研究科教授 平田 昌司
叢書一 漢籍分類の特色 梶浦 晋
第2日(11月11日)
中国目録学史(2)
中国の地方志について
文学研究科助教授 高嶋 航
叢書と漢籍データベース 安岡 孝一
漢籍データ入力実習(1)
第3日(11月12日)
中国目録学史(3)
和刻本漢籍の特色について
鹿児島大学法文学部教授 高津 孝
漢籍データ入力実習(2)
第4日(11月13日)
現代中国書について 石川 禎浩
漢籍データ入力実習(3)
第5日(11月14日)
『東洋学文献類目』について 井波 陵一
実習解説 梶浦 晋

- ・小関隆氏を助教授(人文学研究部)に採用(4月1日付)。
- ・エスポジト, モニカ氏を助教授(東方学研究部)に採用(4月1日付)。
- ・谷川穰氏を助手(人文学研究部)に採用(4月16日付)。
- ・加藤和人助教授(人文学研究部)は, 文部科学省科学研究費補助金により, 1月6日大阪発, 英国サンガーセンターに於いてゲノム研究についての調査研究を行い, 1月10日帰国。
- ・加藤和人助教授(人文学研究部)は, 文部科学省科学研究費補助金により, 1月14日大阪発, 米国シェラトンホテル及び米国ヒトゲノム研究所に於いてヒトゲノム研究の現状に関する調査研究を行い, 1月18日帰国。
- ・古松崇志助手(東方学研究部)は, 文部科学省科学研究費補助金により, 1月12日大阪発, 台湾国家図書館, 故宮博物院図書館及び中央研究院歴史語言研究所図書館に於いて中華人民共和国・黒河流域の元代環境資料についての調査を行い, 1月19日帰国。

所 員 動 静

- ・阪上孝(人文学研究部)教授は定年により退職(3月31日付)。
- ・落合弘樹(人文学研究部)助手は辞任の上(3月31日付), 明治大学文学部助教授に就任。
- ・宇佐美文理(東方学研究部)助教授は大学院文学研究科助教授に配置換の上(4月1日付), 当研究所併任助教授(文化表象研究部門, 4月1日~2004年3月31日)。
- ・森時彦(東方学研究部)教授を当研究所長及び附属漢字情報研究センター長に併任(4月1日~2005年3月31日)。
- ・丸山宏名城大学農学部教授は, 客員教授(文化研究創成研究部門, 4月1日~2004年3月31日)。
- ・緒形康神戸大学文学部助教授は, 併任助教授(文化研究創成研究部門, 4月1日~2004年3月31日)。
- ・岡田暁生神戸大学発達科学部助教授は, 当研究所(人文学研究部)助教授に転任(4月1日付)。

- ・高木博志助教授(人文学研究部)は, 1月20日大阪発, 梨花女子大学に於いて「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」に参加, 大田韓国政府記録所に於いて20世紀の文化財保護史の調査を行い, 1月23日帰国。
- ・籠谷直人助教授(人文学研究部)は, 文部科学省科学研究費補助金により, 1月25日大阪発, ロンドン公文書館に於いて1950~60年代の対日経済外交についての史料調査を行い, 2月7日帰国。
- ・中西裕樹助手(東方学研究部)は, 文部科学省在外研究員旅費により, 2月10日大阪発, 首都師範大学に於いて敦煌学国際連絡委員会準備会に出席及び研究打合せを行い, 2月12日帰国。
- ・高田時雄教授(東方学研究部)は, 文部科学省在外研究員旅費により, 2月17日大阪発, 首都師範大学に於いて敦煌学国際連絡委員会準備会に出席及び研究打合せを行い, 2月19日帰国。
- ・ウィッテルン, クリスティアン助教授(附属漢字情報研究センター)は, 2月13日大阪発, 台北恵日会館に於いて中華電子佛典協会成果発表会専

題講演及び研究打合せを行い、2月20日帰国。

- ・池田巧助教授（東方学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、2002年3月1日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて西南中国のムニャ語についての記述言語学的研究を行い、2月28日帰国。
- ・藤井正人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、2月14日大阪発、トリチュール、パニヤール、トリヴェンドラム及びティルネルヴェリ（インド）に於いてヴェダ伝承の現地調査を行い、2月28日帰国。
- ・菊地暁助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、2月21日成田発、コペンハーゲン国立博物館、ノルウェー民俗博物館及びスカンセン民族博物館に於いて日本の民俗文化財保護に対する北欧の影響についての資料調査を行い、3月3日帰国。
- ・宮紀子助手（東方学研究部）は、3月4日大阪発、文部科学省研究拠点形成費補助金により、ソウル大学校奎章閣及び高麗大学仁村記念館に於いて15・16・17世紀作成の地図資料収集を行い、3月6日帰国。
- ・古松崇志助手（東方学研究部）は、3月4日大阪発、文部科学省研究拠点形成費補助金により、ソウル大学校奎章閣及び高麗大学仁村記念館に於いて15・16・17世紀作成の地図資料収集を行い、3月6日帰国。
- ・森本淳生助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、2月14日大阪発、フランス国立図書館に於いてポール・ヴァレリーに関する資料調査を行い、3月8日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月1日大阪発、山西省考古研究所に於いて先史遺跡の踏査及び出土遺物の調査を行い、3月9日帰国。
- ・ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、3月6日大阪発、中央研究院資訊研究所（台湾）に於いて The digitalization of Chinese News Contents に出席及び論文発表を行い、3月9日帰国。
- ・加藤和人助教授（人文学研究部）は、文部科学省

科学技術振興調整費により、3月8日大阪発、マングリンホテル及び国立シンガポール大学に於いて「アジアにおける生命倫理に関する対話と普及」シンガポール・ワークショップに出席及び研究発表を行い、3月11日帰国。

- ・小牧幸代助手（人文学研究部）は、2月20日大阪発、ジャメク・マスジド（クアラルンプール）、マッキー・マスジド、カラチ大学、スィンド州政府ワクフ庁、ジンナー廟、マンゴー聖者廟（カラチ）、パンジャブ州政府ワクフ庁、タブリーギー・ジャマアト本部及びジャマアテ・イスラーミー本部（ラホール）に於いて宗教事情の調査を行い、3月15日帰国。
- ・稲葉穰助教授（東方学研究部）は、3月5日大阪発、コロombo大学、ペーラーデニヤ大学及びコロombo国立博物館に於いて仏教、イスラーム教の聖地崇拝に関する調査・資料収集を行い、ケーララ大学及びクイロン（インド）に於いて古代海上交易と宗教の伝播に関する調査・資料収集を行い、3月15日帰国。
- ・村上衛助手（東方学研究部）は、委任経理金により、3月6日大阪発、国立故宫博物院に於いて清代檔案の収集、中央研究院中山人文社会科学研究所に於いて第9回中国海洋発展史研討会に出席、中央研究院近代史研究所に於いて外交檔案の収集を行い、3月19日帰国。
- ・金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月13日大阪発、フランス・アルザス日本学研究所に於いてアルザス・パリ国際シンポジウム「日本と東アジアの境界と文化創造」に出席及び論文発表、フランス国家図書館に於いて敦煌資料調査を行い、3月23日帰国。
- ・高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月16日成田発、大英図書館、ロンドン大学 SOAS 図書館及びヴェチカン図書館に於いて新旧キリスト教ミッションの東アジアにおける出版活動に関する資料収集を行い、3月24日帰国。
- ・大浦康介助教授（人文学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、3月5日大阪発、カリフォルニア大学サンディエゴ校、チャールス

- トン大学及びコロンビア大学に於いてアメリカにおける18世紀研究（主にフランス文学・思想に関する）の現状調査及びサド国際学術研究集会（チャールストン大学）出席を行い、3月26日帰国。
- ・中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月14日大阪発、海豊県県誌弁公室（中華人民共和国）に於いてショオ語の現地調査及び資料収集を行い、3月26日帰国。
 - ・ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、3月16日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて「漢字智慧型編碼與應用」ワークショップに出席、中央研究院資訊研究所に於いて“Open Source Buddhist Reads”について打合せ、中華電子仏典協会に於いて大正蔵データベースについての打合せを行い、3月28日帰国。
 - ・東郷俊宏助手（東方学研究部）は、3月19日大阪発、北京崑崙飯店、安国市生薬市場及び北京市内病院に於いて老中医臨床実技研修及び記録、生薬販売市場調査、臨床現場調査を行い、3月30日帰国。
 - ・フリュッシュテュック、サビーネ外国人研究員（人文学研究部）は、3月27日大阪発、ニューヨークヒルトンホテルに於いてAnnual Meeting of the Association of Asian Studiesに出席・研究発表を行い、4月2日帰国。
 - ・辛珠柏外国人研究員（人文学研究部）は、4月17日大阪発、韓国歴史研究会に於いて研究発表及び情報交換、国史編纂委員会に於いて植民地期朝鮮における日本軍に関する資料蒐集を行い、4月21日帰国。
 - ・加藤和人助教授（人文学研究部）は、4月26日成田発、カンクン（メキシコ）カミノリアルホテルに於いてヒトゲノム国際機構倫理委員会へ出席及び研究発表を行い、5月2日帰国。
 - ・古松崇志助手（東方学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により3月28日大阪発、北京大学中国古代史研究中心に於いて中国近世史研究のための漢籍文献史料調査を行い、5月8日帰国。
 - ・高木博志助教授（人文学研究部）は、5月15日大阪発、全南大学に於いて「5, 18 光州事件文化運動シンポジウム」に出席及び報告を行い、5月16日帰国。
 - ・水野直樹教授（人文学研究部）は、5月13日大阪発、ソウル国史編纂委員会に於いて資料調査、延世大学校に於いて「ファシズム支配体制と民衆の生活相」国際学術大会に参加・発表を行い、5月18日帰国。
 - ・ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、5月14日大阪発、オックスフォード大学に於いてTEI評議会の会議に出席及びテキストエンコーディングについての研究打合せを行い、5月22日帰国。
 - ・エスポジト、モニカ助教授（東方学研究部）は、5月27日大阪発、スタンフォード大学に於いて「The Roots of Neidan」ワークショップに出席及び資料蒐集を行い、6月10日帰国。
 - ・井狩彌介教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、7月11日大阪発、ヘルシンキ大学に於いて第12回世界サンスクリット学会に出席・発表及び「現存ヴェーダ伝承の調査と研究」に関する研究総括打合せを行い、7月23日帰国。
 - ・藤井正人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、7月12日大阪発、ヘルシンキ大学に於いて第12回世界サンスクリット学会に出席及び「現存ヴェーダ伝承の調査と研究」に関する研究打合せ・資料蒐集を行い、7月24日帰国。
 - ・高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、7月27日大阪発、中国国家図書館に於いて新旧キリスト教出版活動に関する資料収集を行い、7月30日帰国。
 - ・高木博志助教授（人文学研究部）は、8月20日大阪発、ソウルプレスセンターに於いて「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」公開討論会に出席し、8月22日帰国。
 - ・山室信一教授（人文学研究部）は、8月16日大阪発、インドネシア独立記念塔、ポンティアナッ

- ク虐殺記念碑、クチン英雄記念碑及びシンガポール終戦50周年記念碑に於いて「アジアにおける記憶遺跡と調査活動」に関する研究交流・調査を行い、8月26日帰国。
- ・水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、8月24日大阪発、ソウル国史編纂委員会及び大田政府記録保存所に於いて植民地期法制関係資料調査・収集を行い、8月29日帰国。
 - ・石川禎浩助教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、9月13日成田発、ロシア国立政治・社会史アルヒーフに於いて中国文献調査を行い、9月21日帰国。
 - ・金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、9月22日大阪発、首都師範大学に於いて第二屆《三国演义》版本暨第二屆中国古典小説数字化研討会に参加・論文発表を行い、9月25日帰国。
 - ・安岡孝一助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、9月21日大阪発、英国図書館に於いて文字コードの歴史的資料に関する所蔵調査を行い、9月27日帰国。
 - ・山室信一教授（人文学研究部）は、9月24日大阪発、ソウルの独立記念館、西大門刑務所等に於いて「アジアにおける記憶遺跡と調査活動」に関する研究交流及び調査を行い、9月27日帰国。
 - ・エスポジト、モニカ助教授（東方学研究部）は、8月5日大阪発、コレージュ・ド・フランス図書館及びフランス国立極東学院等に於いて道教・仏教に関する研究打合せ及び資料調査・蒐集を行い、9月30日帰国。
 - ・富谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、9月28日大阪発、ライデン大学、ミュンスター大学、民族学博物館及びストックホルム大学に於いて「東アジアにおける法と習慣」に関する研究・教育打合せ及び出版打合せを行い、10月8日帰国。
 - ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、10月10日大阪発、中国社会科学院考古研究所に於いて文字瓦の調査打合せ、鄴城遺跡に於いて文字瓦の調査を行い、10月17日帰国。
 - ・籠谷直人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、10月12日成田発、ワシントンの国立公文書館に於いて「阪神華僑の国際ネットワークに関する研究」について、華僑華人に関する調査及び資料収集を行い、10月20日帰国。
 - ・山本有造教授（人文学研究部）は、10月28日大阪発、復旦大学を表敬・視察、和平飯店に於いて中国社会科学院中日歴史研究專家委員会との合同会議に出席及び事務局との打合せ、蒋介石生家等視察を行い、11月3日帰国。
 - ・ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、10月29日大阪発、中華佛学研究所に於いて仏教情報学ワークショップに出席、ナンシー大学に於いてTEI文字符号化WG会議及びTEI総会に出席、ラビューゲン大学漢学研究所に於いて漢学研究打合せを行い、11月11日帰国。
 - ・金文京教授（東方学研究部）は、11月6日大阪発、ハーバード大学及びエール大学に於いて講演及び中国小説・戯曲資料調査を行い、11月13日帰国。
 - ・岩井茂樹教授（東方学研究部）は、11月13日大阪発、ソウル東国大学校に於いて明清史国際学術会議における講演及び討論を行い、11月16日帰国。
 - ・高木博志助教授（人文学研究部）は、11月13日大阪発、シャモニホテル（韓国）に於いて「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」に参加、扶余市に於いて歴史的記憶をめぐるフィールドワークを行い、11月16日帰国。
 - ・村上衛助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、11月17日大阪発、上海市博物館及び常習市に於いて近現代、武進県における労働問題・人口流動に関する文献調査を行い、11月20日帰国。
 - ・麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、11月

- 18 日大阪発，エモリー大学に於いて「宗教紛争」国際会議に出席，カリフォルニア大学バークレー校及びハワイ大学に於いて道教関係資料蒐集を行い，11 月 28 日帰国。
- ・竹沢泰子助教授（人文学研究部）は，文部科学省科学研究費補助金により，11 月 18 日成田発，シカゴヒルトンホテルに於いてアメリカ人類学会に出席，フィールド博物館及びカリフォルニア大学バークレー校に於いて『人種』の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究』に関する資料収集を行い，11 月 28 日帰国。
 - ・田中雅一助教授（人文学研究部）は，文部科学省在外研究員旅費により，11 月 19 日大阪発，サンフランシスコ大学，ミシガン大学及びニューヨーク市立大学に於いて「変貌するボルノグラフィ」に関する文献資料収集及び研究者交流を行い，11 月 29 日帰国。
 - ・金文京教授（東方学研究部）は，11 月 27 日大阪発，嶺南大学に於いて明代小説戯曲国際研討会に出席及び論文発表を行い，11 月 30 日帰国。
 - ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は，文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により，11 月 19 日大阪発，遠東博物館（スウェーデン）に於いてアジア・ヨーロッパ考古学ワークショップ出席，デンマーク国立博物館及びギメー博物館に於いて 1920 年代の中国における調査資料の再検討を行い，12 月 2 日帰国。
 - ・佐野誠子助手（東方学研究部）は，文部科学省国際研究集会派遣旅費（一部先方負担）により，12 月 3 日大阪発，香港バプテスト大学に於いて第 5 回「文学と宗教」国際学術研討会に出席及び論文発表を行い，12 月 7 日帰国。
 - ・高田時雄教授（東方学研究部）は，12 月 2 日大阪発，ペンシルヴァニア大学に於いて国際集会《Crossing the Borders of China》に出席し，12 月 10 日帰国。
 - ・船山徹助教授（東方学研究部）は，12 月 2 日大阪発，ペンシルヴァニア大学に於いて国際集会《Crossing the Borders of China》に出席し，12 月 10 日帰国。
 - ・金文京教授（東方学研究部）は，12 月 9 日大阪発，台湾大学東亜文明研究中心及び国家図書館に於いて東亜伝世漢籍文献訳解方法国際学術研討会出席・論文発表及び中国小説・戯曲資料調査を行い，12 月 13 日帰国。
 - ・岡田暁生助教授（人文学研究部）は，文部科学省科学研究費補助金により，12 月 10 日大阪発，チューリッヒ市立図書館及びチューリッヒ大学図書館に於いてグランド・オペラに関する調査を行い，12 月 20 日帰国。
 - ・田中淡教授（東方学研究部）は，12 月 18 日成田発，西安の大明宮含元殿遺跡に於いて大明宮含元殿遺跡保存復元プロジェクト専門家会議に出席し，12 月 20 日帰国。
 - ・森時彦教授（東方学研究部）は，12 月 17 日大阪発，台湾中央研究院歴史語言研究所に於いて創立 75 周年記念式典出席，学術講演及び資料蒐集を行い，12 月 23 日帰国。
 - ・田中雅一助教授（人文学研究部）は，12 月 15 日大阪発，国立シンガポール大学，マドラス大学及びマドラス高等裁判所に於いて宗教事情についての調査を行い，12 月 24 日帰国。
- 訂正
- 人文学報第 88 号中彙報所員動静（132 頁）「横山俊夫（人文学研究部）教授は大学院地球環境学堂教授に配置換（4 月 1 日付）」は「横山俊夫（人文学研究部）教授は大学院地球環境学堂教授に配置換の上，ダブルアポイントメント制により当研究所（文化研究創成研究部門）教授両任（4 月 1 日付）」に訂正します。

外国人研究員

- ・辛 珠柏 成均館大学校 BK 21 研究助教授
植民地期朝鮮における日本軍の研究
(文化連関研究客員部門)
受入教官 水野教授
期間 1 月 6 日～7 月 31 日
- ・FRÜHSTÜCK, Sabine
カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授

現代日本社会の「軍隊」

(文化生成研究客員部門)

受入教官 田中助教授

期間 3月17日～8月31日

・林 満紅 中央研究院近代史研究所研究員

貿易と台湾商人の興起 1860年～1961年

(文化連関研究客員部門)

受入教官 岩井教授

期間 8月15日～2004年1月14日

・王 維坤 西北大学文博学院教授

日唐文化交流の研究

(文化生成研究客員部門)

受入教官 富谷教授

期間 9月15日～2004年3月14日

招へい外国人学者

・DEEG, Max

ウィーン大学組織神学研究所宗教学教授

『出三蔵記集』と『名僧伝』の僧伝研究

受入教官 船山助教授

期間 2月2日～2月21日

・TSCHUDIN, Jean-Jacques

パリ第7大学 LCAO 教授

日本における近代演劇の誕生 — 明治期の日本演劇

受入教官 宇佐美教授・大浦助教授

期間 3月15日～4月11日

・黄 蘭翔

中央研究院台湾史研究所籌備處・副研究員

中国仏教寺院の平面配置の形成過程に関する研究

受入教官 田中教授

期間 8月1日～9月30日

・WANG, Liping ミネソタ大学・準教授

駐防八旗と民族問題 — 清代の都市文化形成における満漢関係の研究

受入教官 岩井教授

期間 8月6日～9月2日

期間 9月19日～2004年9月18日

・林 炳徳 忠北大学校人文大学史学科・副教授

漢代法制史の研究

受入教官 富谷教授

期間 8月11日～2004年2月28日

・彭 建英 西北大学文博学院講師

中国西北地域の民族学の研究

受入教官 富谷教授

期間 10月6日～2004年3月31日

・FERGUSON, Harvie

グラスゴー大学社会学部教授

近代戦争の体験と記憶の研究

受入教官 富永教授

期間 10月15日～2004年5月31日

・桑 兵 中山大学歴史系教授

『梁啓超年譜長編』の研究

受入教官 井波教授

期間 10月21日～12月4日

・池上英子 ニュー・スクール大学大学院教授,

ニュー・スクール大学変動研究所所長

祇園祭の歴史社会学的研究

受入教官 高木助教授

期間 11月10日～2004年1月10日

・黄 寛重

中央研究院歴史語言研究所 研究員兼所長

政策, 技術與經濟 — 日治時期台湾漁業的發展與
變遷唐宋基層武力與基層社會的轉變 — 以弓手為
中心的觀察

受入教官 高田教授

期間 11月20日～12月19日

外国人共同研究者

・秦 小麗 陝西省考古研究所・助理研究員

日中戦争期の中国で発掘した考古史料の再検討

受入教官 岡村助教授

期間 4月1日～2004年3月31日

・韓 亘熙 国史編纂委員会・編史研究士

日本所在韓国史関係資料に関する調査研究

受入教官 水野教授

期間 4月14日～12月20日

・阿 風 中国社会科学院歴史研究所・副研究員

人 文 学 報

中国明清時代における法律・裁判文書の研究

受入教官 岩井教授

期間 9月3日～12月1日

- ・金 孝眞 ハーバード大学人類学科博士課程
「京都都心部における京町屋再生運動と地域アイ
デンティティの変化」に関わる研究

受入教官 高木助教授

期間 9月12日～2004年9月11日

外国人研究生

- ・李 永春

岸田吟香と近代中国

受入教官 山室教授

期間 4月1日～9月15日

- ・LAPTEV, Sergey

漢字文化の拡大に関する考古学研究

受入教官 岡村助教授

期間 10月1日～2004年9月30日

- ・DISTEFANO, Anthony

日本社会におけるゲイ・レスビアン集団への暴力、
ならびに集団内における暴力

受入教官 田中助教授

期間 10月1日～2004年9月30日

- ・楊 文勝

殷周青銅器からみた儀礼制度とその社会

受入教官 岡村助教授

期間 10月1日～2004年9月30日

- ・AMES, Christopher

沖縄のアメリカ村ーグローバルな軍事戦略と
ローカルな経済復興戦略の不安定な関係

受入教官 田中助教授

期間 10月1日～2004年9月30日

- ・朝 克図

ブフ（モンゴル相撲）文化に関する文化人類学的

研究

受入教官 田中助教授

期間 10月1日～2004年3月31日

出 版 物

紀要

人文学報 第87号（紀要第142冊）

2002年12月30日刊

人文学報 第88号（紀要第144冊）

2003年3月31日刊

東方学報 第75冊（紀要第143冊）

2003年3月25日刊

東洋学文献類目 2000年・補遺版

2003年3月30日刊

研究報告その他

漢字情報研究センター東方学資料叢刊第11冊

「周氏冥通記研究訳注篇」

麥谷 邦夫・吉川 忠夫編

2003年3月20日刊

周氏冥通記研究索引

麥谷 邦夫・吉川 忠夫編

2003年3月20日刊

変異するダーウィニズム 進化論と社会

阪上 孝編

2003年11月1日刊

帝国の研究ー原理・類型・関係ー

山本 有造編

2003年11月30日刊

所報

「人文」第50号

2003年3月31日刊